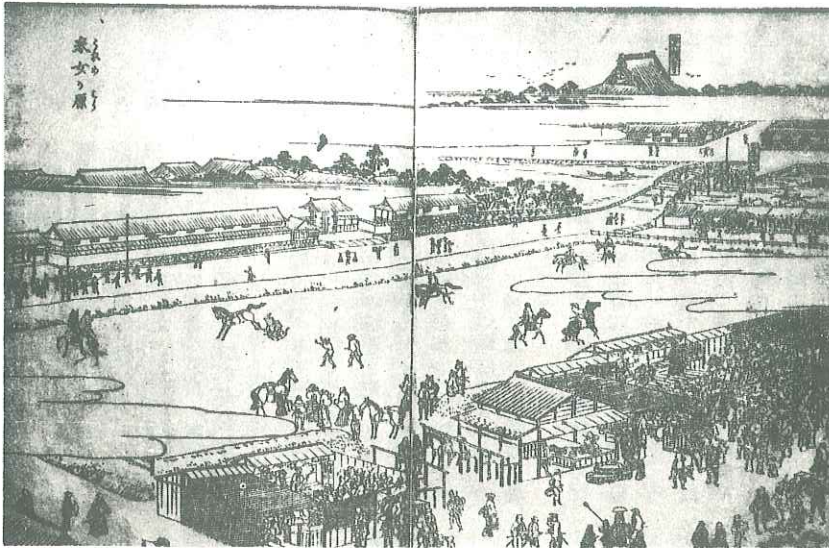


采女町史談

安藤 菊二

図版1 采女ヶ原(江戸名所図会)



1 町名の由来

日比谷を通過して晴海地区に到る晴海通りの南側、銀座五丁目内、一一番地から一五番地にわたる一區画は、明治・大正・昭和の初期にかけて采女町と呼ばれていた所である。町名のかもし出す感じは柔らかく、一種なまめかしさを帯びている。新橋芸妓の洩叢となるにふさわしい町名であった。

采女というのは、わが国上代に天皇家に奉仕し、飲饌の事を掌った女人の称呼である。文武天皇の時に制定された『大宝令』において、宮内省所屬として采女司の設置が

明文化され、その長官を采女正といった。律令の制度は永い歳月の間に崩壊し、実体の失われた空位空官のみが存続した。——采女については、『中公新書』73、『采女』門脇禎二著に詳しい。——徳川幕府には采女司などはあるべくもないのであるが、官職名としての「采女正」は存続しており、『寛政重修諸家譜』の索引(統群書類従完成会編)によると、幕臣で采女正の官

職名を称した人は、青山幸高から六角広安まで三一二名の多数を算する。

采女町の地は、江戸時代中期まで四国の今治城主松平家の邸地があり、初祖松平定房の三代の孫定基が、采女正だったので、松平家がこの地を去って後、地名として采女の称が残ることになったのである。

松平采女正がこの地を土地したのは、享保三年(一七一八)のことで、西続きの木挽町四丁目の町屋とともに、火除空地となった。その由緒から明治二年に武家地の町地への統合が行われた際に、この地にあった敦賀藩邸その他の武家地を併せ「采女町」の町名がつけられたというわけである。この采女町にまつわる歴史の幾つかを、この小稿で纏めておきたい。

2 采女ヶ原の馬場

享保六年(一七二一)に、松平家が去った後の火除空地の東南角地に「御具足師拝借地」が置かれた。同一二年(一七二七)には、空地の中央に細長い馬場が設けられ同一三年には御具足師拝借地の西側に「御弓師拝借地」が置かれ、同一四年(一七二九)には、東北方万年橋際に「西応寺代地町屋」(八五〇坪ほど)ができた。

西応寺は、中世以来芝二丁目にある古い寺院で、天正一九年(一五九一)一月境内地を拝領し、慶長一二年(一六〇七)その地に町家作りを免された。その門前町の

一部が、拡張される薩摩屋敷内に囲込
になって、代地を采女ケ原に与えられ
たのである。

さらに、享保一四年にはこの空地内
西南角に「氷川大乗院拜借地町屋」が
開かれた。

却説、采女町地区の中央に細長い馬
場ができると同時に、(日本橋)橋町
四丁目八郎兵衛店忠兵衛という男が、
馬場の修復掃除を請負う代償として、
見世物小屋を取建てることを願い出て
それが許可になった。

その時許可を受けた小屋は、「二間
四方の商店四ヶ所、同床店四ヶ所、九
尺に老間の畳床廿五間、式間に拾間の
揚弓場壹ヶ所」とあるから、規模はた
いして大きくはなく、その上、馬場そ
のものも、宝暦の頃(一七五一〜一七
六三)には木挽町四丁目の町屋裏に移
され、天明五年(一七八五)に、西応
寺町代地と場所の入替が行なわれると
いった変遷があった。

3 象の渡来

享保一四年(一七二九)に、江戸に
珍らしい話が伝わった。前年(一三年
)六月、交趾国(今のベトナム)から
鄭大威という者が、広南生れの二頭の
象を連れて長崎に着き、この象がはるば
る江戸へやって来るといのである。

二頭の内、牝は長崎で死んでしまい
一四年の三月、広南人象使い二人、広
南人と漳州人の通訳各一人を加えて、
総勢一七人が、雄象に付添ってはるば
る江戸への旅程に上った。一行は四月
二八日に京都に到着。禁裏へ参入して
中御門天皇・靈元上皇の天覧を蒙っ
た。

この折、爵位なくして宮門に入った
ためにはないというので、取りあえず
獸ながら従四位の位記を贈り、「広南
従四位白象」と呼んだと伝えられる。
日本人は、いまだかつて一度もこの

巨大な珍獸を見たことがない。沿道が
見物人によって湧き返った有様は想像
にあまりある。

象は五月二五日に江戸に到着。二七
日には江戸城車寄において、將軍を初
め布衣以上の人々がこれを観覧し、そ
のあと浜御殿の庭で飼養し、一般庶民
の見物を許した。後に、山王日枝神社
の祭礼に、麴町で大象の作り物を曳い
たのは、この時の盛観を模したもので
あったし、この年、象に関する数種の
図書の刊行を見るなど、いかに人々に
強い印象を与えたかが窺われる。

象の人氣はこのように盛んであった
が、困ったのは餌の調達であった。
五月に書上られた「飼料之儀に付
品々書合書」(市史稿・市街篇22)に

よると、象一日の飼料として、「笹百
斤・真芝百斤・真菰百斤・あんなしま
んちう百個・ばせう二・三本・くねん
ほう二百・薬員数不知」とある。

大変な物入なので一五年六月には、
象を望む者あらば、これを「可被三下
置」という町触が出された。

采女ケ原の馬場守忠兵衛は、享保一
九年六月、こんどは象の年間飼育料を
六拾兩と見積り、この費用納入を条件
に、馬場続きに、更に商床二〇軒・畳
床二〇軒の増しを出願、難なくその
許可を受けることができた。

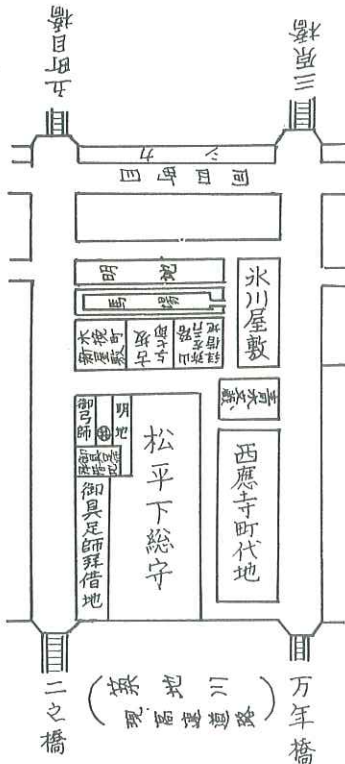
こうして采女ケ原は盛り場として大
きく発展することになった。

幕末頃の采女ケ原の賑いは『狂歌江
戸名所図会』や『新撰東京名所図会』
に詳しいから記すまでもないことであ
るが、貸馬場を初めとして、小屋掛・

葭實張の小芝居、浄瑠璃語り、講釈師
、水茶屋、矢場、釣船宿、さざえの壺
焼、稻荷鮓、豆藏などが軒を並べて、
娯楽施設のすくない下町南部の一大盛
り場となったのである。といっても、
夜は昼の賑いとは打って違って、森閑
たる闇があたりを占領し、菰むしろを
抱えた夜鷹が出没するのであった。

4 昆陽の賜邸

采女町の賜邸の中で、特に私の注意
を惹くのは、延享六年(一七四八)五
月六日、評定所儒者の青木文藏がこの
地に邸を拝領していることで、東南北
三方が通路、南が空地、東西一五間、
南北一一間、坪数一六五坪と、東京都
市史稿、市街篇卷二五に載せてある。
『御府内沿革図書』所載の地図による
と、旧地の大半は道路敷となったが、



図版2 采女町の「宝暦頃の形」 御府内沿革図書

歌舞伎座の右斜前方の角地商店街の一角が、ほぼその地に該当する。

青木文蔵、名は教書、字は厚甫、昆陽はその号である。父は半右衛門といって、日本橋本小田原町で肴屋を営んでいた。文蔵は肴屋の小伴として成長したのである。しかし、生来学を好んだ彼は、京都に上って伊藤東涯の学塾に学び、江戸へ帰って八丁堀の中村又蔵の地所を借りて帷をおろし徒に授けた。いくばくもなく、父母相ついで歿し、文蔵は前後六年の喪に服し、生ける人に仕える如くであった。

たまたま近隣に住み、文蔵の篤実な人柄に感服した与力の加藤又左衛門は町奉行大岡越前守に推挙し、これが彼の出世の端緒となった。

加藤又左衛門は、加茂真淵の門人と和歌を能した加藤枝直である。子息の千蔭が、次の時代に、能書家として歌人として名を成した事は記すにおよばないであろう。

文蔵(昆陽)は、越前守の諮問に応じて救荒食物としての甘藷栽植のことを建言、ついで試作に成功して、元文二年(一七三七)には拔擢されて「書物写御用係」に任ぜられ、しばしば命を奉じて諸州にいたり、寺院・旧家を探って古書を探し、考証してこれを上申した。その集めた文書は八〇部二百

巻におよんだといわれる。後、評定所の儒者に転じ、遷って御書物奉行の職についた。昆陽が吉宗の命を承けて野呂元丈と共にオランダ語を学習し、そのノートが、後に前野良沢や杉田玄白らによる『解体新書』翻訳の際に、些少ながら役立っていることも忘れてはならない。

昆陽は明和六年(一七六九)一〇月二〇日、七二才にして歿し、目黒区竜泉寺に葬むられた。

昆陽の采女町の地に住んだのは、ごく短期間であったが、中央区出身の名家の旧蹟は、記憶せられて然るべきであらう。

5 狩野家の画塾

室町時代にぼつ興して画壇の権力を掌握した狩野派は、江戸時代になってから幕府の御抱絵師の筆頭として、柳営の障壁画や、徳川家豊廟の障壁画の補修、あるいは御前揮毫などを世業とした。狩野家は、中橋・鍛冶橋・木挽町・駿河台・浜町の五家に分れて門戸を張っていたが、画塾を開いて画家の養成に当たっていたのは木挽町の狩野家のみで、明治初期の画壇に盛名を唱われた狩野芳崖・橋本雅邦の両巨人もまたこの画塾から巣立っている。

この記念すべき狩野画塾の跡のいん

滅して訪ぬる人もないのを、私は大いに遺憾とする。この画塾の跡は、采女町時代の二二・二四番地辺、現在の銀座五丁目一三番九一四号辺に当る。

木挽町狩野家は、狩野孝信の次子自適斎尚信(探幽の弟)から出て、養朴斎常信、如川周信、栄川院古信、栄川院典信、養仙院惟信、伊川院栄信、晴川院養信、勝川院雅信と画業を継承し賜邸は初め竹川町(現、銀座七丁目内)にあったが、栄川院の時に、時の執政田沼意次の知遇を受けて、木挽町の田沼屋敷(図版2、松平下総守の邸地跡)内の西南角に当る、日当りの好い場所を与えられて、木挽町に住むこととなった。

栄川院は意次の氣に入られていたの

で、常に庭伝いに公と往来していた。それで、公事も直接公の執事と相談するより、間接に栄川院に依頼する者が多かつたといわれる。

木挽町画塾の塾法については、わが国の絵画史に通じておられた、故梅沢和軒翁の名著『雅邦と邦屋』(大正九年)に詳しい。翁の調査の一部をここに掲載させて頂く。

当時勝川の塾法では、初めて入門した時は、扶持を納めることに為つてゐた。それは恰度初年兵が酷き使はれる様に、新参者は師匠の次ぎの室で、朝は墨をすってチャンと稽古の順序を立て、置き、又は主家の雑用を足したりする。



図版3 近吾堂版、嘉永六年切絵図

此の新入門が、常に七・八人はあった。入門後一・二年で扶持を許され、今度は絵具係と為る。これも五・六人はある。それから粉本係に昇給する。かうなると自由(師匠の画室にも出入が出来、勝手に手本でも珍書

でも引出されるので万事が好都合、
新来の門人などは、此の粉本係の手
を経て借りることに為つてゐるので
此の係りは大いに幅をきかしたも
だ。塾頭に為るには、幾多の年月と
抜群の伎倆とを要するのであつた。

(全書二五―二六頁)

狩野画塾における、若き日の狩野芳
崖の英才振りは、一昨年刊行された桂
英澄氏の『幕末の絵師』(四七年、人
物往来社刊)に活写されている。関心
を持たれる方の一読をすすめたい。

なお、狩野家邸内には、大井戸と呼
ばれる著名な井戸のあつたことを附記
しておく。狩野画塾の蔵に山と積まれ
ていた、代々の巨匠達の手になる粉本
類は、幕末だつたか明治になつたらか
年代は忘れたが、大火に焼けて悉く烏
有に帰し、僅かに遺つた粉本の一部が
上野の国立博物館に珍藏されているそ
うである。

6 切絵図に載る人物

江戸図の中で最も利用されることの
多い切絵図、金港堂版の築地木挽町辺
の図を見ると、今は昭和通りになつて
しまつている、采女町時代の二二―一
六番地辺に、柴田芸庵、清川玄道、大
槻平次といった人達の名が刻されてい
る。

この人達についても一言費さなけれ
ばならない。

イ 柴田芸庵

嘉永四年武鑑に、「奥御医師、二百
俵高、御役料二百俵、柴田芸庵法眼」
と見えている。私はたまたま架蔵の書
を閲して、松平冠山公の息女で、五才
で亡くなった聡慧な童女、露姫の行状
を記した、服部通撰文に成る『淨観院
玉露如泡大童女行状』に、露姫の痘
瘡を病んで褥につくや、老公これを憂
えて、柴田芸庵をして治に当らしめた
とあるを見出した。芸庵はまた、松江
侯の病疹にも當つていた人だったので
ある。

ロ 清川玄道

嘉永七年(安政元年)版武鑑を検し
て御目見医師だつたことを知る。
『当世名家評判記』(悟免庵主人著)
前編巻の上、医の部に

上々吉 清川玄道 木ひき丁

〔頭取、治療よりも金持にとりいる妙
でござい升。ワル口、治療はちと

親よりおとるぜ。

という評判が加えてある。

ハ 大槻平次

仙台藩伊達家の藩医大槻玄沢(号盤
水)の次子六次郎(盤溪)である。享
和元年(一八〇一)五月、玄沢の木挽
町の家で生れた。幼少から家学を受け

長じて江戸昌平醫に学び、晩勵十余年
天保三年(一八三二)三二才の時藩士
に擢でられ、家禄学俸を賜い、学問稽
古人として江戸住居を許された。

弘化・嘉永の頃には、西洋砲術を究
めて全藩の子弟に教え、嘉永六年米鑑
渡来に当り、攘夷論の沸騰する中で進
んで開港の説を採つた。

文久二年仙台に移り、学館義賢堂の
学頭となり、ついで致仕したが、明治
戊辰役の時、奥州諸藩連合軍団の文書
を司り、事敗れて獄に下され、後免さ
れて、明治四年再び来つて江戸に居り

詩書を友として優遊自適した。一一年
(一八七八)六月二三日歿。年七八。
大正一三年従五位を贈られる。

盤溪は初め木挽町二丁目に居を構え
ていたが、天保一四年(一八四三)一
二月二七日の大火に類焼して、木挽町
四丁目宅を転じ、翌一五年三月二二
日、新築祝いの小筵を張つた。日比谷
図書館所蔵の東京誌料中に、この折の
通知状が存するから次に示そう。

災後新正

ト居纏在二七年前。

一夜東風尽付煙。

身与二梅花二共無恙。

寄二入簾下二作二新年一。

新宮告成用前韻自賀

辛苦台成宅一廩。

人間榮辱付二雲烟一。
焚二采万巻二舌猶存。
講説從今三十年。

明弁堂主人

客臘廿八日回祿之憂、余木挽街之宅
亦罹災、蕩然靡遺。於是改卜二地
於第四巷采女原之側、今茲春仲新
宮告成。因以三月廿二日設二暖房
之筵、欲レ勸二同人一觴。伏祈諸老
先生不レ陋二白屋一、賁然來臨何榮加レ
之。更賜以二賀詩一章一、則為レ感不レ
淺矣。

天保甲辰春三月、盤溪大槻崇謹白
この新宅賀宴招待状によれば、盤溪
の初めて木挽町に居を卜したのは天保
七・八年の候にあり、爾來文久二年仙
台移住の年まで、前後二六・七年をこ
の地で過したことになる。

名著『洋学年表』の著者、如電大槻
清修翁は、盤溪の第二子として弘化二
年(一八四五)に、また『大言海』の
著者として令名の高い、文彦、大槻清
復博士は、弘化四年に、この木挽町采
女ヶ原近傍の家で呱呱の声を揚げた。

ここまで記し来つて私はお一事、
事の記すべきものあるを覚える。
しかし、遺憾ながら、紙数が尽きたの
で次号に譲ることとする。